

## 『異文化理解II』（2年生）

英語科 木村政子(文責)

保健体育科 土方伸子(～9月)

保健体育科 池田(尾畑)三鈴(9月～)

### 1. はじめに

今年度は、本校に1年次から在籍している外国人生徒（フィリピン）1名と、ラトビアからの留学生1名を含む計16名の生徒でスタートした。昨年度1年次で『異文化理解I』を受講していた生徒はこのうち6名である。

今年の2年生は、昨年今年と2年続けて「総合的な学習の時間」に『異文化理解』の授業があるため、2年連続での受講を考慮して昨年度から年間計画を立ててきた。昨年度の『異文化理解I』（週1時間）は、“自分史を語る、日本の文化を知る、日本と他国との比較、体験する異文化”を主眼として授業を行ってきたが、今年度の『異文化理解II』（週2時間）については、昨年度のベースを踏まえてさらに多くの体験や討論を重ね、“日本と他国（途上国も含めた）との比較、多くの体験を通して知る異文化”を掘り下げていく活動を行うこととした。

### 2. 各学期授業内容

#### <1学期授業内容>

	回	月 日	授 業 内 容
1 学 期	1	4月14日	2年生LHR（総合についてのオリエンテーション）にて、授業内容概略説明
	2	21日	英語による自己紹介、留学生（ラトビア）への質問 次週のための班分け、担当国のあそびを考える
	3	5月12日	各国の遊び（フィリピン・ラトビア・日本）、次週講演について 感想用紙、次週講師に関する資料
	4	19日	ミキハウス・坂本達氏講演「世界一周自転車の旅で見た 世界の暮らしあれこれ」 合併室、感想用紙
	5	26日	19日講演についてのディスカッション、留学生へのインタビューI（school）
	6	6月2日	留学生へのインタビューII（school続き、daily life, others） 留学生＋外国人生徒からの質問

7	9日	MTGについての説明 (MTG発行の記事を眺める)、青年海外協力隊員とのメール交換のための班分け+初メール送付 宿題：ブータンの高校生へのアンケート 資料プリント
8	16日	東京国際センター訪問 (国際協力事業団、青年海外協力隊について)
9	30日	青年海外協力隊OG・大泉二葉氏のお話「セネガルで出会ったあんなこと、こんなこと」
10	7月7日	30日講演についてのディスカッション、隊員とのメール交換状況確認、夏休みのレポートについて食文化準備 (班分け、レシピ作成【英語+日本語】) 資料プリント
11	14日	食文化実習 (ラトビア・フィリピン・日本)
夏休み		課題：「えっ、変！何これ違う???」と思ったことを実際に体験して」

年度の初めは例年行っているとおり、日本語の出来ない留学生を考慮して、英語による自己紹介やインタビュー、各国のあそびを体験するなどなるべく言葉のハンディをなくすべく努めた。英語による自己紹介は、例年に比べて意外にもかなり積極的な自己PRが相次ぎ、上々のスタートを切った。

また、5月19日の坂本達氏による講演は、この授業を今年前半まで一緒に担当していた土方教諭の尽力で実現したものだが、毎年講演をお願いする方を探すのが大変な中、今回は坂本氏が本拠地である大阪から東京に出てくる時期がこちらの授業日と重なるという幸運に恵まれたのが何よりであった。4年にも及ぶ世界一周旅行で見たこと、感じたことについての坂本氏によるお話は、生徒たちにとってこの1年間で最も強烈な印象の残る授業だったようだ。

さらに、1年次とは違い、1学期から途上国関連の内容を多く取り入れていくという方針から、ブータン王国の高校生との文通およびアンケートのやりとり、JICAと青年海外協力隊について知るための東京国際センター訪問、青年海外協力隊員OGの方のお話を聞く会、MTG (Meet The Globe: 関西大学を母体とした青年海外協力隊員の協力を得て行われる異文化理解活動の支援団体) を通しての青年海外協力隊員とのメール交換のスタート、そして最後には、インタビューで互いの国について情報交換をした総まとめとしてのラトビア、フィリピン、日本の三国の食文化比較実習など、盛りだくさんの内容で1学期を終えた。

#### 〈2学期授業内容〉

	回	月 日	授 業 内 容
2 学 期	1	9月8日	提出物確認 (各国料理感想、夏課題) メール交換進捗状況、ブータンからの手紙配布・アンケート回収 土方Tによるブータン王国のお話&ブータンのビデオ視聴 メール交換進捗状況把握プリント
	2	15日	ブータン王国と日本の比較 (名前の確認、10の質問、アンケートから読み取る共通点と相違点) ブータン高校生名前一覧、日本人アンケートコピー、比較用台紙・付箋
	3	22日	あなたにとっての幸せとは。。。 (ビデオ〈地球家族〉23分)、ディスカッション (日常を振り返る) ビデオ、感想プリント

4	10月6日	冬休みレポート説明、提出物確認 国際協力プラザ訪問 (14:00~15:00) →プラザ説明+協力隊各国調査プラザ
5	20日	冬休みレポートテーマ決定、テーマの調べ学習+隊員にメール
6	27日	夏休みレポートブリーフプレゼン (9人) 感想プリント
7	11月10日	夏休みレポートブリーフプレゼン (6人) 感想プリント
8	17日	夏休み体験レポートより、食文化実習 <4種類の料理+右手で食べる> (豆のカレー、大根のダツィ+赤米、サツマイモの甘煮、シャイ) 感想プリント
9	24日	アディラさんによるウイグルのお話と異文化体験 (トイレ+イスラムのお祈り) 感想プリント
10	12月1日	留学生送別会 <作ってみたい日本食> (関西風ちらしずし、手打ち蕎麦のお吸い物、たこ焼き、どら焼き)

2学期は1学期に始めたブータンの高校生との文通からわかったこと、およびブータン王国についてなどから始め、日本とブータンの高校生の意識の違いや文化の違いに注目した。それに関連して、『地球家族』のビデオを視聴し、「あなたにとっての幸せとは」について考え、ディスカッションを行った。生徒たちは1学期から2学期にかけて、さまざまな途上国の様子やそこで暮らす人々の考え方などに触れてきたため、人によって、あるいは国によって、幸せのあり方が違うということを強く感じるようになったようだ。それに伴って、途上国支援のあり方についても、幸せの定義がそれぞれに違うように、先進国の思い込みで途上国に親切の押し売りをしていないか、本当の支援とは何なのかという疑問が出てくるようになった。

また、夏休みの宿題として「体験レポート」を課したことで、生徒たちは夏休み中に各々違った異文化体験をした。授業では、その体験を選んだ理由、体験前と体験後の心の変化、その文化の背景などについて発表し、かつその中のいくつかを全員が経験することで、問題を共有することができた。

体験レポートの中で多かったイスラム教については、全員が同様の体験をするために、当初は今年の『異文化理解II』(2年生対象)で行った大塚モスク訪問を考えたが、残念ながら今年の訪問予定日はラマダン終了直後ということで、以前受けたような説明やお祈りの見学などもできないことがわかり、急遽、本大学のウイグルからの留学生(イスラム教徒)にお話を聞き、一緒に異文化体験をすることとなった。お話はウイグルについてとイスラム教についてであったが、その前に全員で体験したのは、頭にスカーフをまいてのイスラム教のお祈りと、お祈りの前のトイレであった。トイレでは、紙ではなく水を使い、手で拭く、またその後に念入りに顔や耳、手足を洗って体を清めるという、正式なお祈りの作法を行った。夏休み中の体験でも、ここまできちんとやってみた者はいなかったようで、似たようなことを資料を見ながらやってみた者はいたようだが、このときは実際に留学生に厳しく教えてもらいながらの体験であったため、生徒たちにとっては驚きと同時に大いなる異文化であったようだ。

そして最後は、留学生が帰国するためにその送別会を兼ねて、彼女が帰国後に自力で作れるように日本食を中心とした食文化実習を行った。生徒たちはみな、文化の受け手ではなく発信する側として、大いにはりきって実習に臨んでいた。

〈3学期授業内容〉

	回	月 日	授 業 内 容
3 学 期	1	1月12日	次週からのレポート発表についての説明（発表内容の確認、概略の担当決め、視聴覚教材決定、発表骨子まとめ）
	2	19日	冬休みレポート発表Ⅰ 〈エジプト〉 メモ＋感想プリント
	3	2月2日	冬休みレポート発表Ⅱ 〈エルサルバドル〉 メモ＋感想プリント
	4	9日	冬休みレポート発表Ⅲ 〈パプアニューギニア〉 メモ＋感想プリント
	5	16日	冬休みレポート発表Ⅳ 〈パキスタン〉 メモ＋感想プリント
	6	23日	冬休みレポート発表補足（PNG：外国人生徒担当分＋質問事項について）＋レポート発表からわかったこと、気づいたこと、および1年間の授業を振り返って、3/2の食文化実習メニュー＋班分けプリント、1年間を振り返っての感想プリント（3/2の食文化感想も含む）締切3/4金
	7	3月2日	青年海外協力隊員任国の食文化実習 隊員へのお礼メール

3学期は、1学期からMTGを通して続けていた青年海外協力隊員の方々とのメール交換を軸にした各任国についての調査研究発表を行った。MTGでは、現役の青年海外協力隊員の方々にお願いして、中学生や高校生とのメール交換を通して、直接、任国のことや異文化体験を生徒たちに伝えてもらい、途上国についての理解を広めるといった役割を果たしている。このMTGによる協力隊員とのメール交換はここ毎年行っているが、例年3カ国の隊員に対して3班のグループで行っていたメール交換を、今年はMTGからの紹介数が多かったこともあり、4カ国の隊員に対して4班のグループで行った。

生徒の方は、1班あたり4名程度ということで、ちょうどよい規模ではあったが、班の数が多い分、こちらのメール交換チェックもなかなか行き届かず、また資料の少ない国も多かったため、生徒へのフォローが大変であった。特に、隊員の方によって生徒へのメールが来る回数が極端に違い、それが生徒のやる気にも直結したことは否めない。実際に任国の情勢によって通信事情が違ったり、勤務の状況や住む場所によっても、メールを出せる回数には影響がでてくる。個人差だけではなく、そのような諸事情がすべて異文化理解につながるのだが、実際には生徒の気持ちはそのように割り切れてはいないようだ。そのあたりの“当たり外れ”が生徒個々の活動の成果にも影響を及ぼしていることは事実で、これは今年度の授業終了後に、MTGの顧問をしていらっしゃる関西大学の久保田真弓教授とも今後の課題として話し合ったところである。

それでも、先進国と違い、見たことも、場合によっては名前を聞いたことすらないような国について協力隊員の方々の助言を得ながら必死に調査していくのは、それだけでもかなりエキサイティングなものようであった。特に、本や資料には書いていない隊員の方からの生活情報や、たびたび送られてくる現地の写真など、これだけ日本に情報があふれていても、それが先進国や限られた国中心の、ごく偏ったものであることを痛切に感じさせられたようだ。

そして3学期も1、2学期同様、最後は食文化比較実習で締めくくることがとなった。今回は協力隊の4つの任国ごとの“食”をテーマにしたが、それぞれの班あるいは個人で、半年以上かけて調べてきた

ことが活かされた実習となった。

### 3. 一年間の授業を終えて

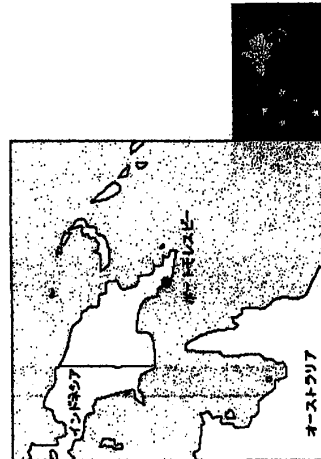
このように振り返ってみると、昨年度の2年生対象の『異文化理解II』でもそう感じたが、数多くの異文化体験を通してさまざまな考え方に触れ、それによって議論や意見交換も活発に交わされたように思う。毎年少しずつ修正を繰り返していくうちに、『異文化理解』という授業のベースは徐々に出来上がりつつあると感じている。今後もこれをベースに改良を加え、さらにより深い、内容の濃いものにしていきたい。

\*参考資料 ～提出物より～

〈資料1〉 青年海外協力隊員とのメール交換を通しての任国調査研究 (パプアニューギニア)

基礎データ

面積	・46.2万km <sup>2</sup> (日本の1.25倍)
人口	570万人 (03年時点)
首都	ポートモレスビー
人種	メネシア人
言語	英語 (公用語)、ピジン英語、モツ語等
宗教	キリスト教多数
歴史	16世紀前半～ ヨーロッパ人の来訪 19世紀後半 1884年 独、ニューギニア北東部を保護領とする (独領ニューギニア) 英、ニューギニア南東部を保護領とする (英領ニューギニア) 1906年 英領ニューギニア、兼領となる 1914年 第一次世界大戦に伴い、豪、独領ニューギニアを占領 1920年 国際連盟、独領ニューギニアの統治を豪に委任 1942年 日本軍進駐 1945年 日本軍降伏、豪州が統治 1949年 豪州を施政権者とする国連の信託統治地域となる 1963年 住民議会設置 1973年 内政自治に移行 1974年 独立 (9月16日)



パプアニューギニアの民族とワントークシステム

はじめに  
パプアニューギニアには800もの民族が共存している。  
私はそんな多民族国家パプアニューギニアでの人々の暮らしの様子を知り、日本との違いを考えようと思い、隊員の神戸さんへのメールでの質問、文職やインターネッツでの検証を行った。

きっかけは、日本と大きく違うところはないかと思っていたときに、神戸さんからシンシンという伝説的で、民族的なお祭りについて聞いたことだ。  
そこで私は日本との大きな違いは民族の多さにあると思ひ、民族について調べてみることにした。ちょうど、ブータンの暮らしについて授業で見たりして、そのときネパール系の人々の抱える問題を知った。そして、「民族問題」は必ず起きるものなのだと感じていたのだ。この国でもあるのかもしれない、いろいろいると知りたくなった。  
私は始めこの「ワントークシステム」は知らずに、民族問題はあるのか？と神戸さんに尋ねてみたところ、パプアは多民族国家であり、それに伴い深く掘付いてこのシステムの問題がある、と教えていただき初めて「ワントークシステム」という言葉に出合った。  
私は、日本にはない、独特なこのシステムに興味を持ち詳しく調べてみようと思つてこのテーマにした。

そもそも、私がパプアニューギニアを選んだのは、日本と一番生活が近いそう、と思つたからだ。以前、地理の教科書で、パプアのポートモレスビーの様子という写真を見たことがある。  
そのとき家は木、茶などでできていて、衣服も下半身だけの人が写っているのを覚えていて、都市もこんな様子なのかと思つた。実際メールを交換し話を聞いてみると、都市は私が想像していたのとは違い原始的な生活もしていないようであったが、少し地方に行くとそれぞれ部族ごとの生活があり、そこはやはり日本とは大きく違うところだ。  
ともあれ、私は民族という視点からパプアニューギニアを見てみようと思つた。

## 歩んできた道〜ワントークの基礎となった歴史

少し、近世から現代までの世界史的な観点からも勉強しておかないといけない。この歴史的背景が、ワントークシステムに関係がある、と神戸さんは言う。まず「ニューギニア」の名称だが、各づけの親はポルトガル人とスペイン人だった。1826年にニューギニア島に上陸したポルトガル人は、島の人々を縮れ毛という意味のバプアと呼ぶようになった。それが国名となったというのは驚きである・・・。

そして1845年にスペイン人の探検家が島の北部に上陸すると、その土地の住民がアフリカのギニア人に風貌が似ていたことからバプアニューギニアと呼ぶようになった。ヨーロッパ人の進出は悪いことばかりではなかった。現在のバプアニューギニアにとっても貴重な食料であるサツマイモは16世紀にヨーロッパ列強にもたらされたもので、またたくまにこの国中に広まった。サツマイモは原産種のタロイモやヤマイモよりも多く収穫できるので食料事情はよくなった。

19世紀以降はキリスト教を広める宣教師や、金を求める一発やが、押し寄せてきた。そして近代になるとヨーロッパの列強が植民地政策をかかげてこの島をドイツ領、イギリス領オランダ領などに分割してしまった。ドイツは第一次世界大戦後、撤退した。その後は国際連盟によってオーストラリアに統治が委任されるようになり、ニューギニア島の半分がバプアニューギニアになった。やがてオーストラリアの開拓が島の奥地まで進み、「石器時代の原住民」の発見、などとおおきなニュースになった。

第2次世界大戦では、1942年に日本軍がラバウルなどを占領し、オーストラリア軍の基地だったポートモレスビーを攻略してしまう勢いだっただけ。しかしそれも1945年に後退し、この年戦争が終わると、この国にも独立の気運が高まり、たくさんの努力を経て、1975年にオーストラリアから独立、国際連盟に加盟して世界の仲間入りを果たした。

しかし、大戦が終わってもバプアニューギニアは前途多難だった。バプアニューギニアが現代文明と接触しはじめてまだ日は浅く、国として政治や行政などを行える人材もなく、そのため問題が山積みだった。文明化も技術不足で進まなかった。

そのため国際社会の仲間入りということではオーストラリアに頼ることとなった。1960年から選挙が行われるようになるようになる。そして1970年になると、小学校なども整備されて学校教育が始まった。義務教育が実現したわけではないが、首都ポートモレスビーなど大きな街には大学や高校もつくられた。そうして75年にはオーストラリアから完全に独立を果たすことになる。

## バプアニューギニアという国

### 世界と無縁だった民族

バプアニューギニアにはそれぞれの部族の言語が違い、山の民、川の民、海の民など多様な民族が暮らしている。特に山岳地方は20世紀前半まで世界の動きとは無縁だった。それが後半になって、石器時代のような状態から一気に現代の中に巻き込まれ、今にいたっている。だからこそ部族ごとの異なる風習や儀式がまだまだ残っていて、独特の彫刻品や絵画など、芸術的な観点からも注目されている。

ニューギニア高地に人が住んでいることがわかったのは、なんと1930年ごろだとい

う。4万年ほど前のバプアニューギニアは、東南アジアやオーストラリアと陸続きだった。山岳地帯に住む部族の先祖はオーストラリア系の住民だったが、彼らはインドネシアのスマトラやボルネオあたりから移動してきたモンゴロイドによって高地に追いやりられた。

先祖は私たちと同じモンゴロイドだとされているが、オーストラリアからの移住民などと交じり合いながら熱帯に長い年月暮らししている間に今のような風貌に変化していったらしい。

そうして何万年もの長い間、ヨーロッパやアジアの大陸文明の影響を受けずにバプアニューギニア独特の文化を作り上げていった。自然環境も多様で、さまざまな民族が育っていた。

バプアニューギニアには私たちが知っている自然とは全く違う自然があるという。人の侵入を拒む壮大な密林、その地方によって、そして地域帯には今でもマラリアが存在する。その過酷な自然のもとで豊かな精神を持っている人々は、全ての自然に神が宿ることを信じて疑わない。そんな彼らは祖先の霊を敬い、シンシンなどに象徴される精霊と交歓する儀式や風習が日常生活に溶け込んでいる。

都市には出稼ぎなど、様々な部族が見られる。神戸さんに、人々がそれぞれ違う民族だということとは区別できるのか、と聞いてみると、なかなか分からないがやはり海と山とは違うなどは分かり、慣れてくると結構分かるものだという。ちなみにその民族によっては(神に海)見た目での男女の区別が難しい人もいるそうだ。

しかしこの独立は促されてなされたものだということ。

それぞれの民族にとって、この促された独立でなにかを獲得したり、大きく生活が変わったわけでもなく、それぞれの民族は今までと同じように、それぞれ別の村で生活をした。

この促された独立、つまり国民は国の政治への関心の薄さがワントークシステムの原因ともなっているのだ。

また、この国はかつて日本軍によって占領され、とても残酷なことが行われていたという。このことも、詳しくは触れないがきちんと知っておかなくてはならないことなのだと思う。

ワントークシステムとは

#### ワントークとは一極的な事情

このように説明してきたとおり、パプアニューギニアには約800の言語があるといわれる部族社会である。そういうわけで部族内での結束、帰属意識は非常に強く、同じ言葉を話す同族をワントークと呼び、パプアニューギニアでは非常に大きな社会的要素となっている。ここでは国に対する帰属意識、アイデンティティは低く、それよりも同族ワントーク内への意識が高いといえる。

この国の国会議員でさえ国に対しての専任というよりは自らのワントーク内への利益誘導を最優先するといわれているそう。国会議員がそうならば、国の中で誰が、という感じがするが・・・例えばこの国では都市間や地方間の道路が貫通していないケースがほとんどであり、国家としての経済的利益を考えただけインフラ計画がされていない。

神戸さんの話によると、「以前もポートモレスビーとレイというところの間に幹線道路がない。国としては予算も取ったことだし早く始めたい、と思っただけだ。ところが、一部の民族が土地を空けなかつたり、工事に絡む利権の争いが常にあるために開始すらできないでいる。また、それだけでなく民族間、ラスカルがくるからやめてくれというこ」とらしい。(ラスカルとは強姦集団のことだ。)道路ができれば物流に多大な影響があるし、国としてももっと潤う道を探ることも出来るかもしれないが、自分の村がどうなるかの方が大事なのだ。」ということらしい。

また、公金の横領も非常に多いといわれている。その金の流れつく先はワントークである。国会議員となった者は、ワントーク内の仲間に対し、気前よく金をばらまくことが当然のこととして通ってしまっていると共に、それこそが国会議員となることの意義、とさえ言う。

ワントーク間では、資源・財力・権力をもつものは同族へ還元し、同族間で共有しなればならぬという不文律がある。都市部に移り住み、運良く雇用の機会に恵まれたとしても、それを頼ってくるワントークに収入の多くをほとんど持っていかれてしまう。また、同族者が都市部で雇用の機会を得たとすると、収入のあるワントークを頼って、地方から若者が多流出してくる。だが、都市部においても雇用機会に恵まれているとは言いがたく、都市部の失業率の増加に拍車をかけているという。

そして職に就けなかった若者の一部がラスカルを結成し、都市部などの治安の悪化を招いている。

#### ペイバック

ペイバックというのは、必ずワントークの中で扱われる風習の一つだ。要するに「仕返し」である。

例えば部族間でいざこざが起こって、片方の部族の誰かが殺されたとする。その事実があれば、殺された側は殺した方の部族の誰でもいいから仕返ししていいという決まりだ。国としても事実上これを認めているのだ。

また少し困るなあと思ったのが、警察官にも同じ事起こすということだ。ある警察官が犯罪者を逮捕、拘束したとすると、拘束された犯罪者のワントークからその警察官に対してペイバックを行う。したがって警察官も被害者になるのはご免だと、ここでの警察官とは単に警察官の服を着た人、という要素が強い。

ペイバックは別に殺し合いに限らず、社会の色々なところで発生するものである。怒られて気分を害した。新しく来た奴に自分のポジションをさらわれた。だから家のものを盗ってやろう。など様々なケースがある。ペイバックとは逆恨みでもあるので、正しいことをやっただと思っても、ペイバックにあう危険があり、これは神戸さんも実際に経験したことあり、これは非常にやりにくいところだと言う。

最近の例ではある現地人がある部族の子供を車でねて死なせてしまったのだが、この場合も当事者ははねた子供が属する部族からのペイバックに怯えることになる。当事者はペイバックを恐れて自分の村へ帰り、家族への補償金をワントークから募ることになる。村民全員で補償金を作るというわけだ。さらに、ペイバックが殺し合いに発展しないように、各々部族の長は話し合いを持つ。これが、トラブルが起こったときに事象を收拾される手段のひとつとなっている。



## 身近に存在するワントーク

職場などにおいてもワントークは見えにくいものの、しっかりと幅をきかせている。これは直接パプアニューギニアの家族との付き合いのない神戸さん自身がこのシステムの短所だとあげたことだ。人事はワントークの中で決まってしまうたりするし、家族が遊びに来たからと、仕事を友けてしまうことも1度や2度ではない。ここからくる極端な依存性の高さも、神戸さんの悩みの種だという。

また、公的機関などを担う担当者についても重要だ。例えば直接その担当者ではなく、その担当者が属するワントークの人間と対立が生じてしまった場合、今後その担当者とも関係がぎくしゃくせざるをえない。担当者がいったいどのワントークであるか把握することは重要なのである。

## ワントークの長所

このようにみていくとワントークは悪い点ばかりなのかと思ってしまうが、もちろんそんなこともない。

ワントークの恩恵というのはいったん中に入れば十分に受けることができる。コミュニティに入れば、村人みんなを守ってもらえる。地方に在住の協力隊員が、あるとき強盗に遭い、金品を盗まれたが、その隊員はしっかりと現地に根ざした活動を行っていたことから、その土地の部族に「ワントーク」として認められていた。そして後日犯人がわかったときは、その犯人に対してペイバックがしっかりとおこなわれたようである。

さらに、最大の長所といえるのが、このワントークシステムのおかげで、極端な貧困がない、飢餓状態に落ちることもないことである。

村に行けば家族を第一に考える、家族やその周辺と助け合って楽しくやるという環境が自然なまま維持されている、と神戸さんは言う。

## ワントークを考える

このワントークシステムは、パプアニューギニアに住むそれぞれの部族がずっと世界と無関係なところに住んでいたことが大きいのではないだろうか。そこで自分たちの独自の文化を築きながら暮らしていたのが、近代になって急に世界の中に入ることとなってそれはそれぞれの部族にとっては戸惑いの多いことなのだと思う。

もちろん国に協力することは彼らにとっても大切であるし、その恩恵を受けることもできるが、長年自分たちのワントークで支え合ってきた彼らにとっては、今の時点で国と村では村の方が重要なものなのだ。

この国が志向する一般的な管理システムは、ワントークという古来よりむらのなかで機能してきたシステムとは合わなく、そこに国としてのジレンマもあるようだ、と神戸さんは言う。

国がこのシステムを認めている、ましてペイバックまでも認めているというのは驚きでもあるが、納得がいく気がする。

このシステムによる治安の悪化などの問題はたくさんあるが、今彼らを無理に押さえつけることは国としてもできないのだろう。そしてなにより、国としてもワントークシステムを壊すことは絶対にしたくないのではないだろうか、そこには彼らの誇り、文化、家族への愛情がまっまっていると思う。

事業、かわりに国はオーストラリアの警察を派遣させ首都でパトロールを始めたそうだが政府のオーストラリア人の大臣たちは自分たちの村に降りまじょうと進業している。村に降りれば食べ物もあるし、都会の豊穡とした雰囲気を感じてそれなりに平和な生活ができるから、という理由からだ。

国はこのシステムを認めながら、それに応じた対応をしている。

しかし、私は部族同士の対立は何とかなしなさいといかないのではと強く思う。私だけでなくそれは国もわかっていていること、それぞれの部族の人たちも感じているこのなのだろうが、村や家族を重要に考えているあまり、個人としての権利や尊重というものがおろそかになってしまっているのではないだろうか。ペイバックは、もちろんその気持ちはよくわかるしそのおかげで村全体に助けてもらえらるが、当事者がたまたま悪い人だった場合に、全く悪くない人が、そのワントークに属しているからという理由だけで危険なめに遭わなくてはいいのはおかしいことである。

さらにそれによって、相場状態になっている都市部などでは治安が悪化し、人々が安心して暮らせなかつたり、結局地方へ帰ったほうがいいといわれずすべての人が職を求められなくなってしまうという恐れがある。

大学を出ても半分は就職できないというこの国にとって、治安の悪化、そして地方に

辨されることはよくない。

それぞれの部族を尊重することは重要である、しかしそれにもなっていないように、互いが共存できないようでは国の経済などにも悪い影響を及ぼす。

また、部族同士の共存に限らず、それぞれの部族の国への関心を高めることがとても必要だと思う。ワントークの誇りというのは誰もが十分に持っているのだから、今度はパプアニューギニアとしての誇りを同じくらい強く持つてもらいたいことが大切だ。一節「国に協力するつもりなんかない」という人々がいる中、交通の発達、経済の発達のために国の政治への関心を高めることが必要だ。

一方で、このワントークシステムは族裔族化が進み、家族や部族との関わり、つながりが希薄なものとなりつつあるといわれる日本に対極の価値観を見せ付けている。私はこの国のコミュニケーションを大切にしている態度にとっても感心し、いいなと思う。そしてこうすることで極端な貧困がない、というが、私はまさにこれは先進国、現代の資本主義国に欠けている部分を明白に表していると思えてならない。神戸さんも、仕事上このシステムによって賞まされることも多々あり、直達家族と触れる機会がほとんどないため悪い面をフォーカスしてしまいがちだけれど、このシステムは家族、村をとっても大切にすることで、これからもその意識がなくならないでほしいと言っていた。

先進国が途上国に教えられることは多い。

この国の変わった習慣を覗いてみて、その問題、そして良いところを見てみて、そしてこのワントークシステムとはまるで逆の自分の国と比較してみて、改めて自分の国についても考えさせられた。結局解決することは難しく、パプアニューギニアという国は、この深刻な問題を抱えながら、そして守るべきワントークを大事にしなから、複雑な状況の中で今後を考えている。

私もこのシステムの悪い面と良い面を両方見てみると、どちらともいえず複雑な思いになる。

## 隊員さんとメール交換をして

パプアニューギニアの民族とワントークシステムをしたらしたのも神戸さんにとにかくさかで興味を持ったものであるし、やはり現地にいるひとと直接聞くことが出来るのは凄くて、そして的をええた意見や情報を聞けるということ、とても意味があった。途中で長い間送らずとも迷惑をかけてしまい申し訳なかったが、本当に感謝したい。神戸さんは大学の仕事で、ワントークの中に入るということにはなかつたようだが、都市部での状況をいろいろと聞くことができた。

やはり日常生活では良いが、仕事では困ることがたくさんあるようだ。

その他にも日常で日本と違う、という身近な情報を得るのは嬉しい。これからも日本とは違った、という身近な情報を得るのには嬉しい。これからは日本とは違った、そして現地の人々の暮らしに根付いたいろいろな情報を教えていただきたい。

参考文献：ニューギニアの贈りもの 平田晴敏

パプアニューギニアの祭り紀行 辻丸純一

[www.mvz.co.jp/houkokushutou/newminisakkan/04041okabe.htm](http://www.mvz.co.jp/houkokushutou/newminisakkan/04041okabe.htm)

[www.mofa.go.jp/mofai/area/pnz/](http://www.mofa.go.jp/mofai/area/pnz/)

その他神戸さんとのメール交換をもとに作成

